

未経験者による剣道指導の課題克服に向けて —高校での授業実践を通して—

教育実践力高度化コース

16AD002

上野 翔大

【指導教員】 松本 真 磯田 三津子 古田 久
【キーワード】 武道必修化 有効打突 気剣体一致 全習法 分習法

1. はじめに

平成20年3月改訂の中学校学習指導要領に、第1、第2学年の保健体育で武道が必修になることが明記され、平成24年度から完全実施されるようになった。それまで中学校の保健体育で、武道の領域は学年ごとに選択となっていたが、この改訂により、男女共に全ての中学生が第1、第2学年において武道を学ぶこととなった。武道必修化となったことで、武道が「伝統と文化を尊重しそれらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と規定する教育基本法における教育の目標を実現するための役割を担うことになった。

武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、基本動作や基本となる技を身に付け、相手の動きに応じて攻撃をしたり、相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができる運動であり、なぜ今剣道を学ぶ必要があるのかということについて考えてみると、全日本剣道連盟は、「剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である」と考えており、剣道を学ぶことは、「心を学ぶ」こととなり、自分自身を高められ、日本のよき伝統文化を学ぶ単位であると言える。

剣道は相手と相対して行われる対人競技である。相手を攻めくずし、相手の弱点や隙といった機会をとらえて打突をする。竹刀を媒介とするために力が直接的に作用することも少ないといわれている。そのため個人の体格、体力あるいは、年齢、性別に応じた競技が可能であると考えられる。中学校学習指導要領保健体育編では、教科の目標を「心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。」としており、幼少年から高齢者など老若男女を問わず行え、生涯スポーツとして親しまれる剣道は、教科の目標である「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」ということを達成するためのよい単位であるといえる。

また、剣道は「静と動」が表裏一体となって心技体の成長を築き上げる。稽古の前と後に行う黙想は、自己の

精神を統一させ、明鏡止水の境地へと導いていく。集中力を最大限に高める心の自己コントロールそのものである。また、一方では、相手に一対一で対峙し氣勢を充実させて体全体から渾身の一撃を狙う躍動的な姿は、剣道の醍醐味である。

このような伝統文化を学ぶ剣道の授業を通して培われる心と体のコントロールは、様々な生活の場面で生かされ、生徒個々の「思考力、判断力、表現力」となってこれからの時代を生きる若者にとって必要不可欠となる。

「剣道」の単元構成を考え、授業開発、授業実践をすることは、「生きる力」の根幹をなす部分の育成のために重要な役割を担うはずである。

生徒からみた剣道は「伝統的」「礼儀正しい」といった肯定的な意見もある反面、「痛そう」「暑そう（寒そう）」「くさそう」「怖そう」などの否定的なイメージが強い傾向にある。指導者側からみると、「指導方法」「所作」「審判」が難しいと感じているケースが多く、剣道を専門に学んでいない教員には、授業という短期間での剣道の要点をおさえた指導は大変難しいといえる。専門教員の不足だけでなく、武道場などの設備や剣道具の不足といった経済的な面も剣道を学校選択から遠ざける要因になっている。武道の授業における種目別実施校の割合は、文科省の調査によると柔道は65%、剣道は30%、その他は相撲やなぎなたなどとなっており、剣道の実施率が柔道に比べ低いのは、こういった要因が影響していることが考えられる。

しかし、剣道は重傷事故の事例も少なく、日常生活で活用できる歴史的要素が他の種目より多いため、高い教育効果が期待される単元の一つと認識している。正に、学習指導要領の目的を達成させるためには、剣道がより適していると考えられる。

全日本剣道連盟では学校体育実技「武道」指導資料として「剣道授業の展開」を刊行し、剣道授業の学習内容や単元計画、授業実践例や学習資料といった剣道授業の基本的な手引きを紹介している。また、近年では剣道授業におけるカリキュラムが多く研究されており、効果的な指導方法や、授業の導入からまとめまで、様々な指導法について研究、提案されている。

しかし、「剣道授業の展開」を実践し、検討した例は

ほとんどなく、これを剣道未経験者でも理解できるものなのかどうかは検証されていない。また、指導内容について生徒の実態に即した授業内容が考えられているとは言い難く、多様な個性を持つ生徒が多くいると言われていた現代の学校では、指導書通りに授業を展開することが生徒自身のためになるとは考えづらいところがある。剣道の指導に関して言えば、剣道経験者ですら指導が難しいとされており、それは剣道未経験者の教員からしてみれば尚更である。

数ある指導書には、授業で行うこと（活動内容）や指導のポイント（つまづきに対するアドバイス）がのっているが、指導書を見ただけでは理解が難しく、剣道の作法や基本動作は、剣道ならではのものがあり、経験者でないとしっかりと理解することができず、それを上手く生徒へと伝えることは難しいと考えられる。また、生徒の実態を観察し、それに合わせた指導を行うことも難しいといえる。

剣道の本質は一本を取るということにあると考えている。剣道の本質は「有効打突」とも言われ、有効打突は、剣道試合・審判規則第12条に、「充実した気勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるもの」と規定されている。この「一本」を取ることで気持ち良さや喜びを感じ、剣道の楽しさをより深く味わうことができるのではないかと考える。

しかし、剣道は習得に時間がかかる運動であると言われていたため、授業などの短い時間の中では技能の向上を期待することはできず、授業における剣道では多くの生徒が剣道の本質である一本・有効打突の定義を満たした打突ができていないと言えない。平田ら(2016)は高校の授業実践から、中学校における剣道の授業の技能に関する達成レベルを再検討する（下げる）必要があるのではないかと述べている。

授業では、幅広い種類の技や数多くの試合を行うといったことも良いが、技能レベルの低いチャンバラのような剣道をしてしまえば、剣道の本質に触れることができない授業展開になってしまうとも考えられる。

授業の補助として剣道部などの生徒に見本を実演させるなど、経験者に手伝いをしてもらうことも有効な手段である。これに関しても剣道未経験の指導者はうまく活用することが課題であると考えられる。

そこで、剣道の本質をとらえた授業づくりを目指して授業実践を行う。ただ打突部位に当てる・叩くといった

技能レベルでなく、しっかりと打突するといった感覚を生徒に感じさせるといった質の高い有効打突を打つことができるよう、2つの指導法を実践することで、より良い指導法について検討をする。また、授業者の指導観や、授業における生徒の意欲や技能の変化などを見て、剣道未経験の教師でもより簡易的に実践できる指導方法についても検討を行う。

2. 実践内容

本実践は、高等学校の保健体育の剣道授業の中で行う。実践校では、1年間の通しで剣道授業が設定されており、そのうち2学期の間の計8コマの中で実践を行う。

1学期には、剣道の礼法や作法、防具の着装、素振り、基本打ちといった剣道の基本を学習した。2学期では、1学期に学習した基本を引き続き学習するとともに、約10～15秒の間で掛かり手が一方的に技を打ちこむ掛かり稽古や、お互いに対等な立場として攻め合う地稽古、試合といった応用練習を行うよう単元計画を組み立てている。

授業は、有効打突の定義である「充実した気勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるもの」を身に付けて打突することができるようになることをねらいとし、気剣体の一致が完成した打突ができるようになるよう指導を行う。

授業を担当する2つのクラスに、全習法的な指導と、分習法的な指導を実践する。剣道は習得に多くの時間がかかると言われていたり、普段の生活や運動とは大きく異なった動きをする運動であることから、1つ1つの内容を細かく指導する必要があると考えられる。しかし、限られた単元の学習時間が設定された授業では、多くの授業時間を確保することは難しい。そこで、できる限り1つ1つ細かく指導を行う分習法と、ある程度のところで次の技能へと進む全習法をそれぞれ取り入れた指導を行うことで、生徒の意欲や技能において差が出るのではないかと考え、それぞれの指導法で実践を行う。

全習法的な指導をAクラス、分習法的な指導をBクラスで実践し、それぞれのクラスにおいて生徒の関心・意欲・態度面と技能面の様子を観察し授業自体の評価を行う。また、生徒の様子とともにアンケート調査も行う。そのなかで生徒の意欲・技能向上や、剣道未経験者の教師でも容易に指導できるような効果的な指導方法を考え検討していくことを目的とした。

表1 指導内容

回	日程	指導内容 (Aクラス)	指導内容 (Bクラス)
1	9/26	準備運動、素振り（正面打ち・早素振り） 防具の着装の復習、基本打ち（面・小手・胴）、気剣体の一致の説明とその実践練習 面打ちの判定勝負	
2	10/3	準備運動、素振り（正面打ち・体さばき・早素振り） 基本打ち（面・小手・胴）、気剣体の一致を意識した自由技の練習、基本打ちの判定勝負	

3	10/10	準備運動、素振り（正面・早素振りを竹刀に打突） 足さばき（前後、1歩→面打ち、面の打ち抜け） 基本打ち（面・小手・小） 基本打ちの判定試合	準備運動、素振り（正面・早素振りを竹刀に打突） 足さばき（前後、1歩→竹刀に面打ち、面の打ち抜け） 基本打ち（面・小手・小） 基本打ちの判定試合
4	10/17	準備運動、素振り（正面・体さばき・早） 基本打ち（面・小手・胴・小手面・小手面胴） 掛かり稽古、引き面・面体当たり引き面 応じ技（面に対して抜き胴） 試合説明、試合練習	準備運動、素振り（正・左右・早） 足さばき【1歩ずつ→速く、1歩入って面打ち（竹刀有り・無し）、連続面打ち】 基本打ち（面・小手・胴・小手面） 掛かり稽古、引き面
5	11/7	準備運動、素振り（正・体さばき・早） 基本打ち （面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴） 面に対して抜き胴 掛かり稽古、地稽古、試合練習	準備運動、素振り（正・早素振りを竹刀に打突） 足さばき（1歩ずつ→速く、1歩入って面打ち、面の打ち抜け） 基本打ち（面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴）、応じ技（面に対して抜き胴）、掛かり稽古
6	11/22・11/28	準備運動、素振り（正・体さばき・早） 基本打ち （面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴） 面に対して抜き胴 掛かり稽古、地稽古 試合練習	準備運動、素振り（正・体さばき・早） 足さばき（1歩ずつ→速く、1歩入って面打ち、面の打ち抜け） 基本打ち （面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴） 掛かり稽古、応じ技（面に対して抜き胴） 試合説明、試合練習
7	11/28・12/1	準備運動、素振り（正・体さばき・早） 基本打ち （面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴） 面に対して抜き胴 掛かり稽古、地稽古 試合練習	準備運動、素振り（正・体さばき・早） 足さばき（1歩ずつ→速く、1歩入って面打ち、面の打ち抜け） 基本打ち（面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴）、掛かり稽古 応じ技（面に対して抜き胴）、試合練習
8	12/5	準備運動、素振り（正・体さばき・早） 基本打ち （面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴） 応じ技（面に対して抜き胴） 掛かり稽古、地稽古、試合練習	準備運動、素振り（正・早） 足さばき（1歩ずつ→速く、面打ち、面の打ち抜け） 基本打ち （面・小手・胴・小手面・小手面胴・引き面・引き胴） 掛かり稽古、応じ技、試合練習

3. 研究方法

1, 期間

平成29年9月26日～12月5日

2, 対象

埼玉県U高等学校1年生男子、剣道授業選択者39名
(Aクラス18名、Bクラス21名)

3, 実践内容

本実践は、全日本剣道連盟から刊行されている「剣道指導の手引き」を参考に、気剣体の一致を身につけさせる授業を行う。

授業内で生徒の様子を観察するとともに、ビデオ撮影を行い、生徒の関心意欲態度や技能を確認する。授業後、生徒にはアンケートを記入させ、その内容と授業者の指導観を考慮しながら指導法について検討を行う。

4, 分析方法

毎時間、授業者は生徒の関心・意欲・態度、技能の様子をチェックし、評価を行う。

アンケートは、選択式(全17項目)の質問、記述式(全5項目)による質問、生徒自身の技能自己評価チェックから構成されるものを実施した。また選択式の質問項目は四件法によるものを行った。

4. 授業実践における成果

1) アンケートによる指導法の検討

質問1「授業を楽しいと感じたか」という問いに対し、「当てはまる」と答えた割合がAクラスでは5割ちかかったのに対し、Bクラスでは2割に満たなかった。これはAクラスでは試合練習を多く行い、Bクラスでは素振りや足さばき、基本打ちなど時間を比較的多く行った結果、試合や地稽古のようにゲームのような感覚で剣道をおこなうことができたAクラスの方が楽しさを感じることができたのだと考えられる。

質問2「剣道を楽しいと感じたか」という問いには、「当てはまる」と答えた生徒がAクラスでは6割だったのに対し、Bクラスでは3割に満たなかった。質問1とほぼ同数の回答が見られたことなどから、質問1と同様の理由でAクラスの方が楽しいと感じた生徒が多かったのだと考えられる。

質問3「授業(剣道)には進んで取り組めたか」という問いには特に差はみられなかった。

質問4「気剣体の一致について理解できたか」という問いには、「当てはまる」と答えた生徒がAクラスでは1割ほどであったのに対し、Bクラスでは3割近くを示

した。また、「どちらかという当てはまる」と答えた生徒を含めても B クラスの方が1割ほど高い値を示した。これは基本練習をより細かく指導したことにより、生徒が気剣体の一致を意識して打突を行うなど、理解を深めることができたのではないかと考えられる。

質問5「気剣体の一致を実践できたか」という問いに対しては、A・Bクラス間における差は見られなかった。どちらのクラスにおいても「どちらかという当てはまる」「どちらかという当てはまらない」「当てはまらない」と答えた生徒の割合が全体の9割だったことから、ほとんどの生徒が、納得のいくような気剣体の一致をできるように出来なかったと考えられる。これは、気剣体の一致が普段の動きとは異なる動作であることや複雑な動きなどが含まれていることから、実行することが難しいことが考えられる。

質問6「大きな声を出して打つことができたか」という問いに対しては、どちらのクラスも「当てはまる」と答えた生徒は約2割にとどまった。このことから、自信を持って大きな声を出している生徒は少ないということがわかる。授業では気剣体の一致を身に付けさせた打突を行うことができるようにすることを目的としていたため、生徒が大きな声を出すことができるような取り組みが必要であったということが考えられる。

質問7「踏み込みをタイミングよくできるようになったか」8「踏み込みをする際、上手く音がでるようにできたか」という問いでは、どちらの質問でも「当てはまらない」と答えた生徒の割合がAクラスの方が2割ほど多く見られた。Bクラスでは、分習法における指導の一貫で足さばきの練習を毎回行ったことで、納得のいくような踏み込みとまではいかないが、比較的タイミングよく音をだせるような踏み込みができるようになったのではないかと考えられる。

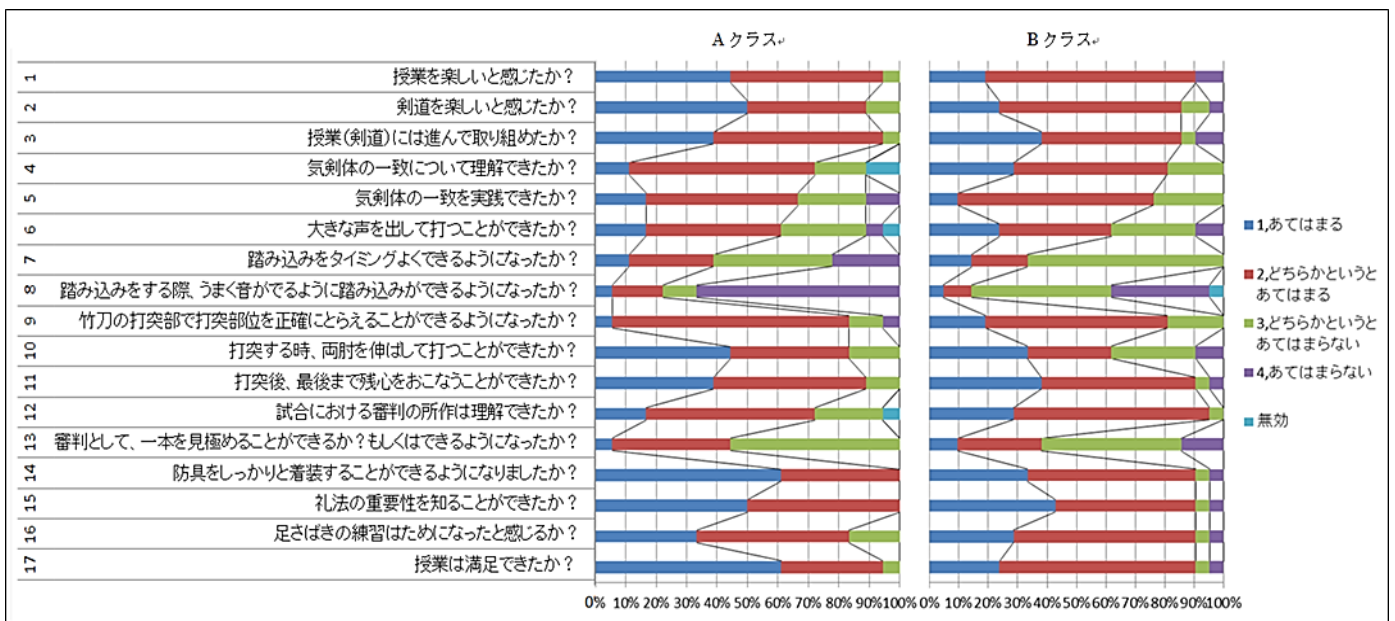
質問9「竹刀の打突部で打突部位を正確にとらえることができたか」という問いに対しては、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒が、A・Bどちらも8割を超えており、生徒たちはただ竹刀で相手を叩くのではなく、竹刀の打突部と相手の打突部位をそれぞれ意識した打突を心がけることができたのではないかと考えられる。

質問10「打突する時、両肘を伸ばして打つことができたか」という問いに対して、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒は、Aクラスでは8割を超え、Bクラスでは6割に留まった。Aクラスの方が2割ほど高かった理由については、試合などの実践練習などを多く行ったことで、相手に打ちを届かせようという意識から自然と肘を伸ばして打つようになったのではないかと考えられる。また、全体の約7割の生徒が「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えたことから、今回の指導で授業者が実践させたかった手首を使った打突ができていたのではないかと考えることができる。

質問11「打突後、最後まで残心を行うことができたか」という問いに対しては、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒がA・Bどちらも9割ほど見られた。これは、授業者の指導の中で、「残心は一本を取る上で必要不可欠であり、打って抜けた後、振り返って構えるところまでやって完了する」と言っていたことから、一本を取るために最後まで残心を行うことができたのではないかと考えられる。

質問12「試合における審判の所作は理解できたか」という問いでは、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒がAクラスでは7割ほどであったのに対し、Bクラスではほぼ全員がそう回答していた。基本練習をより細かく指導したことで、理解を深めるこ

表2 アンケート結果



とができたのではないかと考えられる。

質問13「審判として一本を見極めることができるか」という問いに対しては、A・Bどちらのクラスも「当てはまる」と答えた生徒が1割にとどまった。また、それぞれのクラスの回答の割合にほとんど差が見られなかったことから、気剣体の一致を理解しただけでは、有効打突の判定をすることは難しいということが分かる。

質問14「防具をしっかりと着装することができるようになったか」という問いに対しては、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒が、どちらのクラスも9割を超えて見られた。剣道の授業は通年で行っており、1学期から継続して防具の着装を行ったことで、防具の着装の仕方が身に付いてきたのだと考えられる。

質問15「礼法の重要性を知ることができたか」という問いに対しては、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒が、どちらのクラスも9割を超えて見られた。剣道は相手を尊重する運動であり、授業の始めと終わりの礼はもちろん、道場に入る前や稽古をする前後の礼を行っていたことで、生徒が礼法の重要性を感じられたのではないかと考えられる。

質問16「足さばきの練習はためになったと感じるか」という問いに対しては、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒が、どちらのクラスも8～9割ほどであった。足さばきの練習を行ったことで、剣道の動きの理解を深め、またそれが気剣体の一致を完成させるための一助になっていたのではないかと考えられる。

質問17「授業は満足できたか」という問いに対しては、「当てはまる」と答えた生徒が、Aクラスでは6割、Bクラスでは2割ほどであった。このことからAクラスの方が授業に対して満足感を得られたということがわかる。これはAクラスが授業内容を全習法の形式で行ったことによりBクラスに比べて試合や地稽古などの練習を多くすることができたため、より多く楽しさや喜びを感じることができたからではないかと考えられる。「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒で見ると、どちらのクラスも9割を超えていたことから、全体的な満足度は高い傾向にあったのではないかと考えられる。

2) アンケートの自由記述から見た検討

①授業全体を通しての感想

Aクラス

- ・難しかった、まだできないので練習したい。
- ・打つことができると楽しい、気持ち良いと感じた。
- ・だんだん上達していくことを感じられた。
- ・礼法などを学ぶことができ、基礎練習なども人間形成に役立つと感じた。
- ・はじめは興味がなかったが、今では楽しくてもっと

やりたいと感じるようになった。

これらの意見から、上手く打突することができたときに喜びや楽しさを感じることができていることがわかる。自身で技能の向上を実感している生徒が多く、剣道を難しいと感じながらも上達をし、その結果、楽しいと感じることができているということがわかる。

技能の上達には基本練習が重要であり、基本練習により技能の上達が見込め、それを実践する地稽古や試合などの場を多く確保したことで楽しさや喜びを感じることができたのではないかと考えられる。

Bクラス

- ・初めての剣道をしてみて、礼法や剣道の基礎を知ることができた。
- ・全体的に楽しく授業ができた。
- ・1学期からの継続によってより難しさを実感し、上達することもできたと思う。
- ・上手く技が打てるようになり楽しいと感じた。
- ・試合をもう少しやりたい。

Aクラスと同様に、技能が上達による喜びや楽しさ、授業全体の充実感などの意見が見られた反面、「打突が難しく上手く打つことができなかった。足さばきが難しくもっと練習をしていきたい」といったような自身の技能に納得がいかない様子も見られた。Bクラスでは、基本や足さばきの練習を多く行い、より細かなところまで指導を行った。踏み込みの音や残心のやり方、打突の仕方など多くのことを意識して取り組んだ結果、まだ足りない点があると思う生徒がいたのではないかと考えられる。また、「もっと上手く打てるよう練習していきたい」などの意見から、技能を向上させたいという気持ち、向上心を持っているということがわかる。

②剣道をやってみての感想

Aクラス

- ・上手く打つことができたときは気持ちいい。
- ・胴を正確にとらえることができた。
- ・小手を打つのが難しい。連続技が難しい
- ・試合で一本を取ることが難しい。
- ・踏み込みが難しい。

打突部を正確にとらえて打つことができたときに気持ち良さを感じることができていることがわかった。打突部位の中でも、胴は音になりやすく、初心者である生徒達でも打った時に音になり、「打った」という感覚を得ることができているのではないかと考えられる。

「試合で一本を取ることが難しい」といった意見が何人かから見られた。基本練習の中で、より質の高い有効打突を身につけることができず、試合で活用することができなかったのではないかと考えられる。

Bクラス

- ・試合などで一本を取ったときに気持ちいい。
- ・胴を正確にとらえることができた。

- ・小手を打つのが難しい。連続技が難しい。
- ・踏み込みが難しい。

A クラスでは「試合などで一本を決めることができない・難しい・なかなか一本をとることができない」といった意見が多く見られたが、B クラスでは「一本を決めることができ気持ち良い・楽しい」といった意見が見られた。基本技や足さばきの反復練習により、より質の高い有効打突を打つことができるようになり、それを試合で実践することができたために、B クラスでは有効打突を取るということに関して肯定的な意見が得られたのではないかと考えられる。

選択式のアンケートにおける質問1「授業を楽しいと感じたか」2「剣道を楽しいと感じたか」とともに、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と答えた生徒が9割近く見られたことも含め、剣道をやってみて「基本練習をしたことで試合で技を出すことができた」、「基礎練習を行ったことで、その後の応用の練習も行うことができた」といった意見もいくつか見られたことから、剣道の試合練習や地稽古だけでなく基本練習からも、剣道の魅力が生徒に伝えることができたからではないかと思われる。

どちらのクラスにおいても「小手を打つのが難しい」といった意見が見られた。小手は打突部位が小さいこと、打たれた際に痛みを感じやすく、掛かり手として打つ際に力の入れ具合が難しいことが考えられる。そのため、掛かり手が打ちやすいよう元立ちの打たせ方を指導したり、経験者が小手打ちの見本を生徒相手に打って体験させたりするなど、打つことだけでなく打たせるといった元立ちの動きの重要性も指導を行っていくことが必要であると考える。

踏み込みや連続技においても「難しい」という意見が見られた。踏み込みや連続技などは習得するのに時間がかかると言われている。生徒は、ほぼ全員が初心者であり、授業の時間内だけでは踏み込みや連続技を習得することは極めて困難であると考えられる。

アンケートから、納得のいくような踏み込みや連続技の習得はできなかったが、難しいということに気づいたうえで踏み込みや連続技を身につけていきたいと生徒が考えていることが分かった。ただ「できない」と言って終わるのではなく、今後も取り組んでいきたいと生徒が思っているということは、授業内で「気剣体の一致」を理解し、有効打突の定義を満たした打突の習得を目指しているということが考えられる。

③授業の良い点

A クラス

- ・基礎をしっかりと学べた。
- ・試合をすることで、真剣勝負の雰囲気を味わえた、楽しかった。
- ・多くの相手と練習や試合ができた。

A クラスでは、「試合をすることで緊張感がある剣道ができた」などの試合を行うことができたことに対して肯定的な意見が多く見られた。基本だけでなく、応用である試合や地稽古を行うことで、より楽しさや喜びを感じることができたのではないかと考えられる。

B クラス

- ・基礎をしっかりと学ぶことができた。
- ・毎回基本練習をすることで復習できる。
- ・初心者に適した練習ができた。
- ・基本打ちがしっかりとできるようになった
- ・防具のつけ方がしっかりとできるようになった。
- ・礼法や審判の動きがしっかりと理解できた。

B クラスでは、「礼法や審判法、防具の着装などをしっかりと学べた」といった意見が見られた。A クラスに比べ、基本練習をより多く行ったことで、1つ1つの取り組みが丁寧になり、礼法や審判法、防具の着装の仕方の理解につながったのではないかと考えられる。

どちらのクラスにおいても「基礎をしっかりと学ぶことができた」「基本打ちが上達した」といった意見が多く見られた。「気剣体の一致」を身に付けた打突の習得をねらいとしていたため、基本練習を多く行った。結果として、基本打ちの上達へとつながり、そういった点では良かったのではないかと考えられる。

④授業の悪い点

A クラス

- ・基本練習が長い、試合が少ない。
- ・踏み込みに関する練習が少ない。
- ・気剣体の一致についてもっと指導をしてほしい。
- ・試合の説明が少ない、審判ができない。

A クラスでは、踏み込みが上手くできないと考える生徒がおり、踏み込みの練習が少ないという意見が挙がった。B クラスに比べて足さばきの練習の時間が少なかったことで、音を出すことや打突と同じタイミングでの踏み込みをより難しいと感じ、納得のいくような踏み込みの習得に至らなかったのではないかと考えられる。

B クラス

- ・基本練習が長い、試合をもっとやりたい。
- ・声を出せなかった、出していない人がいる。
- ・足さばきの練習をもっとしたい。

A クラス同様、踏み込みを上手くできないと考える生徒がいたためか、足さばきの練習をもっとしたいという声も挙がった。また、足さばきの練習を行ったからこそ、足さばきとか踏み込みの難しさを、より理解することができ、もっと練習をしたいといった考えが出てきたのではないかと考えられる。

「声を出せなかった。周りが声を出していない」という声もあり、生徒が進んで声を出せるような環境や取り組みを考え、指導していく必要がある。

どちらのクラスにおいても「基本練習の長さ」、「試

合数の少なさ」が挙げられた。基本練習が重要であるということ、技能を身に付ける上で役に立つと考えている反面、基本練習は同じことの繰り返しのためにあまり面白く感じていない場合もあることがわかった。

どちらのクラスでも「試合をやりたい」という声が多く挙げられた。A クラスでは審判法に不安を抱えている生徒もおり、一本（有効打突の定義）や審判法についてしっかりと理解をさせるような取り組みを考えていかなければならない。

⑤ 3学期に向けての課題点、期待すること

A クラス

- ・試合がしたい、より緊張感のある試合をしたい。
- ・もっと大きな声を出す。
- ・正しい剣道を目指す、竹刀をもっと速く振れるようになりたい。

B クラス

- ・試合がしたい、対人戦を多くしてほしい。
- ・もっと大きな声を出せるようになりたい。
- ・しっかりと打てるようになりたい。

どちらのクラスにおいても「試合がしたい」という声が多く挙げられた。3学期は、帯であつがっている剣道授業のまとめの時間でもあるので、試合時間を確保することはもちろん、基本練習と同じように試合練習も反復して行うことで、審判法や有効打突の見極めなどもできるようになるのではないかと考える。

3) 生徒の技能における自己評価

生徒全体の評価としては、面、引き面における自己評価が高い傾向にあった。面は5～6割、引き面が約4割の生徒が「満足のいく打突をすることができる」と回答していた。面は剣道の最も基本的な技であり、授業の中で一番多く練習をしたということもあり、自己評価を高くつける生徒が比較的多かったのではないかと考えられる。また、胴に関しては、打突部位であるのが比較的大きいという点や、打った際に弱い力でも大きな音になるため、生徒自身が「打った」という感覚を味わいやすかったのではないかと考えられる。

小手と小手面胴における自己評価は低い傾向にあった。自由記述のなかでも、「小手を打つことが難しい」といった意見が見られ、的が小さいということ、面や胴に比べ元立ちの動きで小手の位置が変わってしまうために打ちにくいということ、打たれると痛いという考えから自身が打つ際の力のコントロールが難しいことなどから、満足のいくような小手を打つことができなかつたのではないかと考えられる。

小手面胴に関しては、小手と同様に自由記述で「連続技が難しい」という意見がいくつか見られた。小手自体が難しいということ、連続して打ちこむために竹刀の振り、足さばきといったことを素早く行うなどの高度な技

術が必要になってくるため、どちらのクラスでも自己評価が低い傾向になったのではないかと考えられる。

クラスごとに見てみると、A クラスでは、小手面における自己評価が B クラスに比べて高い傾向にあった。A クラスでは試合や掛かり稽古、地稽古などの実践的な練習を多く行ったため、連続技を打つことができるようになったのではないかと考えられる。

表3 技能自己評価 (A クラス)

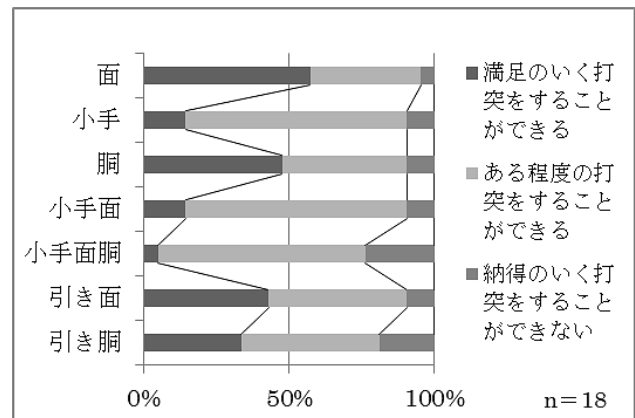
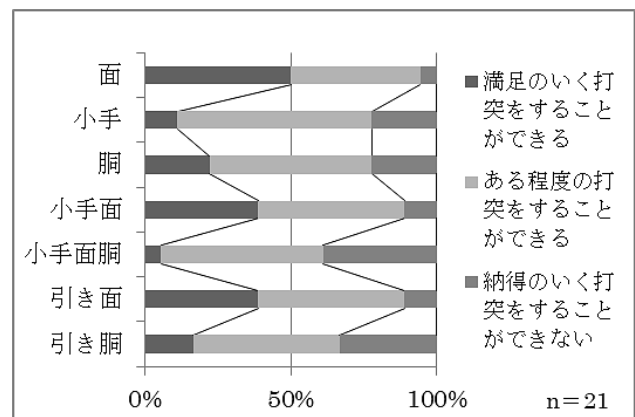


表4 技能自己評価 (B クラス)



4) 授業者から見た生徒の様子

授業者から見た各クラスの様子として、A クラスは全体的に積極的に授業に取り組んでいた。また、声が大きく活気があり、剣道を楽しんでいる様子がよく見られた。しかし、B クラスに比べ、基本打ちや足さばきの練習を突き詰めて行わなかつたため、基本となる打ち、正しい姿勢や作法が十分には身につかず、試合で腰が引けた体勢をとってしまったり、打突後の残心ができなかつたり、礼法や作法を雑に行うなどの姿が見られた。意欲的に授業に臨むことができているが、技能面では B クラスに比べ十分とは言えない状態でもある。

B クラスは、全体的に真面目であり、練習を一生懸命行う傾向がある。また、基本打ちや足さばきの練習を毎時間行ったことで、気剣体の一致を意識した打ちができていた。A クラスに比べ、練習特に試合において、適正

な姿勢での打突や最後まで残心を行うことができていた。アンケートにおける技能の自己評価ではAクラスとあまり差がなかったことを考えると、自己評価を低くつける傾向がある。しかし、大きな声を出している生徒は少なく、全体的に声が出せていない傾向にある。また指示されたことは行うが、それ以上の意欲的な行動はあまり見られなかった。

Aクラスが先行して試合をした際に、試合者の生徒たちは、腰が引けて姿勢が崩れ、足さばきもバラバラになり、打突をしても残心がないような状態が多く見受けられた。このような打突では、有効打突の要素を満たしているとは言い難く、授業者がねらいとしていた、「生徒が一本を取る、有効打突を打つ」といったことで気持ちよさを感じ、剣道の魅力を味わうことができる」を達成することができないのではないかと考えられた。

しかし、授業で初めて試合を行った際、生徒から「剣道をしてる感じがした」「どこをどう攻めればよいかわからなかった」「真剣勝負だから打たれないために打てなかった」といった声を聞くことができた。また、試合練習を重ねることで、だんだんと技能が身に付いていく様子も見られた。

Bクラスにおいては、Aクラスに比べて基本練習の時間を多くしたこともあり、試合練習を初めて行ったときから、正しい姿勢や気剣体が一致した打突というのが見られた。

これらのことから、Aクラスでは試合練習を何度かすることで、Bクラスでは基本や足さばきの練習を行ったことで気剣体の一致を身につけさせることに、つながっていくということがわかった。どちらの指導法においても気剣体の一致を身につけることは時間がかかってしまうということがわかった。

5. 考察

今回、全習法では、基本的な技能を完全には習得せずとも次の段階へと進むという授業方法を実践した。分習法ではできる限り習得したうえで、次の段階へと進むという方策をとった。実際に授業を展開した結果、全習法型は各実技内容を次へ次へと進みながら行い、分習法型はできるだけ多くの生徒が各技を打つことができるようになるまで指導を行った。しかし、剣道は習得するまでに多くの時間がかかるとされており、授業の中で、それぞれの技を完全に習得するといったことは難しいと考えられる。そのため、授業内でそれぞれの技能について評価段階を設定し、それを達成することで次の段階へと進むようにした。結果として、指導内容やその進度には大きな差はなく、明確な違いとしては分習法での指導において毎時間足さばきを行ったことが挙げられる。

今回の授業実践では、気剣体の一致を身につけさせ、有効打突の定義を満たした打突ができるようにするために指導内容や方針を考え、指導を行った。また、身につ

けた打突技能を用いて、試合や地稽古を行えるようにすることを目的としていた。実践の結果、全習法型で指導した方が意欲が高まるということがわかった。技能は基本や試合練習を繰り返すうちに身につけてくるが、授業時間が確保されていないと難しいと考えられる。

分習法は基本技能を習得させ、それを試合で使うことができるようにするためには全習法より有効であると考えられる。しかし、基本練習が多いため生徒の意欲の向上はあまり期待することができないのではないかと考えることができる。

気剣体の一致を身に付けることに時間がかかってしまうことを考えると、より意欲を向上させることが期待できる全習法的な指導が良いのではないかと考える。

生徒から「試合がしたい」という意見が多く見られたことから、人との勝負などで楽しさや喜び感じるのだと考えることができる。授業の始めの方に、勝負として基本打ちの判定試合を行ったが、それは各試合者が一本ずつ打突をして、どちらが有効打突として良い打ちをしているのか判定してもらい勝負を決するものであった。生徒はそれでは満足はできなかったようで、打ち合いをしたり、打つか打たれるかの駆け引きをしたりすることが緊張感を生み、楽しさを感じることができたのではないかと考えられる。

これらのことから生徒の意欲向上をはかる上で、試合はとても有効な手段であると考えられる。他の運動と同様に剣道の授業においても、単元のできるだけ始めの段階で、試合を行うことができると良いのではないかと考える。

6. 参考文献

- 文部科学省(2013)「中学校学習指導要領解説保健体育編」.
- 全日本剣道連盟(2009)「学校体育実技『武道』指導資料剣道授業の展開」全日本剣道連盟.
- 糸岡夕里・日野克博・中岡祐紀・佐伯沙織・池内裕紀(2011)「中学校における『剣道』の授業実践-生徒の剣道に対するイメージに着目して-」愛媛大学教育学部紀要 第58巻 p137-144.
- 上原昌弘(2014)「剣道『単元プログラム』の開発-「安全で緊張感を楽しめる試合」の成立を目指した授業展開の工夫」群馬県総合教育センター.
- 香田郡秀・長尾進・吉田泰将(1989)「剣道の初心者指導に関する一考察-初心者への打ち返し分析と自己の動作の意識について-」大学体育研究 11:29-37.
- 石坂友司(2013)「中学校保健体育における武道必修化の影響と授業展開に関する一考察」関東学園大学紀要 Liberal Arts 第21集.
- 平田佳弘・櫻間建樹・朝岡正雄(2016)「高校の授業実践を通して見える中学校における武道必修化の問題点」筑波大学附属坂戸高校研究紀要 7号 p253-256.
- 木原資裕・園山由華・林祐輔・中野竜太郎・堀江修平・金森優太・秋津久範・篠原健真・田村律子(2016)「中学校体育授業『剣道』における段階的指導の検討」鳴門教育大学授業実践研究.